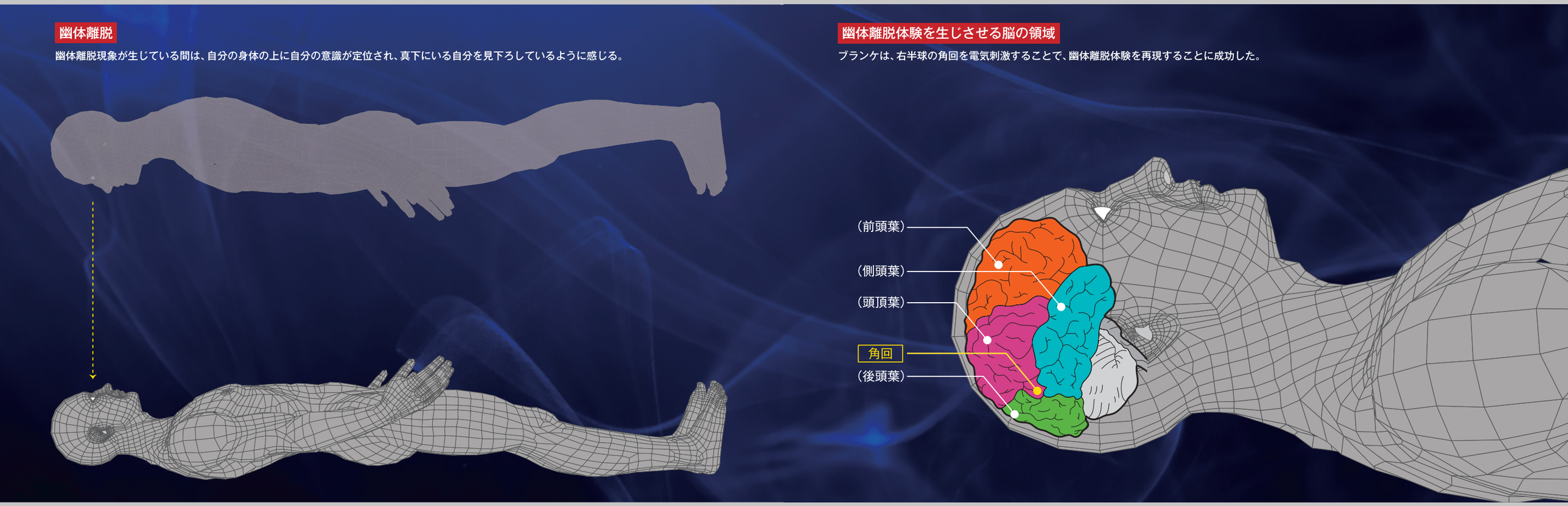
幽体離脱と輪廻転生の謎

Keywords | アストラル体 | 角回 | バーチャルリアリティ | フォールスメモリー |



幽体離脱あるいは体外離脱と言われている現象は、自分の意識が自分の身体から外側に抜け出すという主観的な体験のことを言う。宙に浮いたような感覚を伴いつつ自分の身体を外側から見下ろしたり、空高く舞い上がって高速で移動したりするように感じられることもある。このような体験は、年齢や性別、文化圏や社会的な地位などと無関連に1割から2割程度の人が体験することが知られている。睡眠中に生じるケースが最も多く、また、向精神薬（こうせいしんやく）などの服用時や病気やけがなどで苦しんでいる最中、臨死体験時などにも見られることがある。

◆自己の身体認知プロセスの混乱？

幽体離脱を説明する仮説の1つは、実際に私たちの意識成分が肉体を離れて漂っているというものである。このような意識成分をアストラル体と言う。この仮説は、オカルト好きな人だけでなく一般の人にも非常に人気がある見解であるが、実際にこの説を信じている科学者はほとんどいない。その理由は、アストラル体という物体が科学的に発見されていないことや、肉体を離れていて目などの感覚器官を持たない物体がなぜ自分の姿や遠くの景色を「見る」ことができるのかを説明できないからである。

では、なぜこれほどまで多くの人が幽体離脱を体験しているのだろうか。この問題を脳神経科学の観点から説明しようとしたのが、ジュネーヴ大学病院の神経科医オラフ・ブランケである。彼は、2002年に「ネイチャー」誌に発表した論文の中で、大脳の右半球の角回（かくかい）（→032）を電気刺激することにより体外離脱体験を再現することができたと報告している。また、彼は3Dで作成したバーチャルリアリティの人物に自分と同じ行動をさせ、それをリアルタイムで見せることによって人は自分が体外離脱していると感じるようになること、そのような状況下では自分自身の身体に加えられた痛み刺激に対する感受性が低下し、その代わりに3Dイメージに対する侵害に敏感になったということを明らかにした。彼は、幽体離脱は脳が自己の身体を認知するプロセスの混乱からくる錯覚だと考えている。

◆人と話すうちに形成された記憶？

一方で、私たちが死亡した後で、私たちの精神がアストラル体として体外に出て、別の個体として生まれ変わる輪廻転生（りんねてんせい）、リインカーネーションという現象の存在が一部の文化圏の人々の間で信じられている。わが国もそのような国の1つであり、幕末に程久保村（現在の東京都日野市）に住んでいた農民の息子勝五郎が、「自分は、もとは久兵衛という人の子どもで、名前は藤蔵であった。5歳のときに天然痘で亡くなった」と言い出した事件は世界的にも有名である。また、超心理学（ちょうしんりがく）の研究者イアン・スティーヴンソンは、生まれ変わり信仰のあるインドやスリランカでこのような事例を大量に収集している。

しかし、このような事例も精査してみると、事例の信頼性はそれほど高くないということがわかっている。生まれ変わり現象は、夢や幽体離脱体験を人と話しているうちに前世の自分がイメージ化されフォールスメモリー（偽りの記憶）が形成されてしまったり、周りの人々からの誘導的な質問によって、その記憶が実際の出来事を取り込んでより現実的なものに再構成されてしまうことによって生じるものであり（→091）、自分自身でもそれが想像によるものなのか、前世から引き継がれた記憶であるのかが区別できなくなった状態ではないかと考えられている。（越智啓太）